

これまでの審議内容のまとめ

1 家庭教育の充実をはかる上で考えられる課題について

(1) 家庭においてみられる課題

子の教育については、保護者が第一義的責任を有するものであるから、家庭教育は、まず、個々の家庭において保護者が行うべきものであるといえる。

しかしながら、近年、共働き世帯の増加、核家族化の進行により、保護者が子どもと過ごす時間が確保できないなど、家庭教育を個々の家庭だけで行うことは難しくなっている。

そこで、行政や地域により、家庭を支援する取組みが行われているが、次のような課題がみられ、支援の取組みが家庭に届きづらい状況である。

- 子育て世代の家庭は、周囲との関係が希薄になりがちで、家庭の状況が外部から見えづらくなってきている。
- 支援が必要なのはどの家庭か、あるいは、どのような支援が求められるのかといったことを、支援者が把握しづらくなってきている。
- 子育て関係の行事を実施しても、なかなか保護者の参加にはつながらないなど、保護者とのつながりづくりの難しさを感じる。
- 特に、子育てに関する意識が低い保護者に取組みを知ってもらう、関心を持ってもらうことが難しい。

(2) 地域において取組みを進める上での課題

家庭教育の充実をはかるための取組みについても、これまでの提言と同様「西区の地域力を活かし、地域の人々が家庭に関わる形で進められる」べきものとする。

しかしながら、地域においてこうした取組みを始め、継続していくことは簡単ではない。例えば、次のような状況等がみられるからである。

- 取組みに参加していただく支援者が確保できない。特に、中心となり活動してくれるような人材が見つからない。
- 西区では、祭礼、防災等に関係する人々のつながりはあるが、それを教育・健全育成の取組みになかなか活かせていない。また、地域において個々の役割を担う者の間では連携がはかられているが、役割を超えた結びつきは薄い。
- 地域においては様々な意見があり、地域の人々の理解や協力が十分に得られず、取組みを継続、発展させていくことが難しくなってしまう事例もみられる。
- 取組みを続けていく中で次第に支援者の意欲が失われてゆくと、活動全体が下火になってしまうこともある。

こうした地域にみられる課題の解決がはかられなければ、家庭教育の充実をはかるための取組みを進めていくことは難しいものとする。

2 本年度審議の中心事項及び実施されるべき取組みについて

(1) この提言において示す中心事項

これまで2年間の会議では、家庭の課題の解決等のために「どのような取組みを行うか」ということに主眼をおいた審議を行い、提言してきた。

その上で、本年度、さらに地域で行われている取組みに関する調査や過去の提言に基づき実施された事業結果を踏まえた議論を行う中で、取組みを立ち上げ、継続し、また、期待した効果を得るための方策が講じられることも重要であるとの認識に至った。

そこで、本年度は、取組みが実施、継続され、また、期待した効果を発揮するために、地域において行われるべきことなどを中心に審議を進めた。

(2) 実施されるべき取組みの整理

本年度審議の中心事項に沿った審議結果を示していくにあたり、まずは家庭教育の充実をはかるために実施されている、または、実施されるべきと考えられる取組みについて整理する。

西区においても、地域の人々が中心となって定期的に保護者を集めた座談会や、放課後地域会館等に子どもたちが集まる場所をつくるといった取組みが行われている。また、子どもの居場所づくりや生活習慣の確立に寄与する目的をもって子ども食堂が実施されている事例もみられる。

こうした取組みを大まかに分類すると、次の図1のとおりとなる。

図1 家庭教育の充実をはかる取組みの分類と例

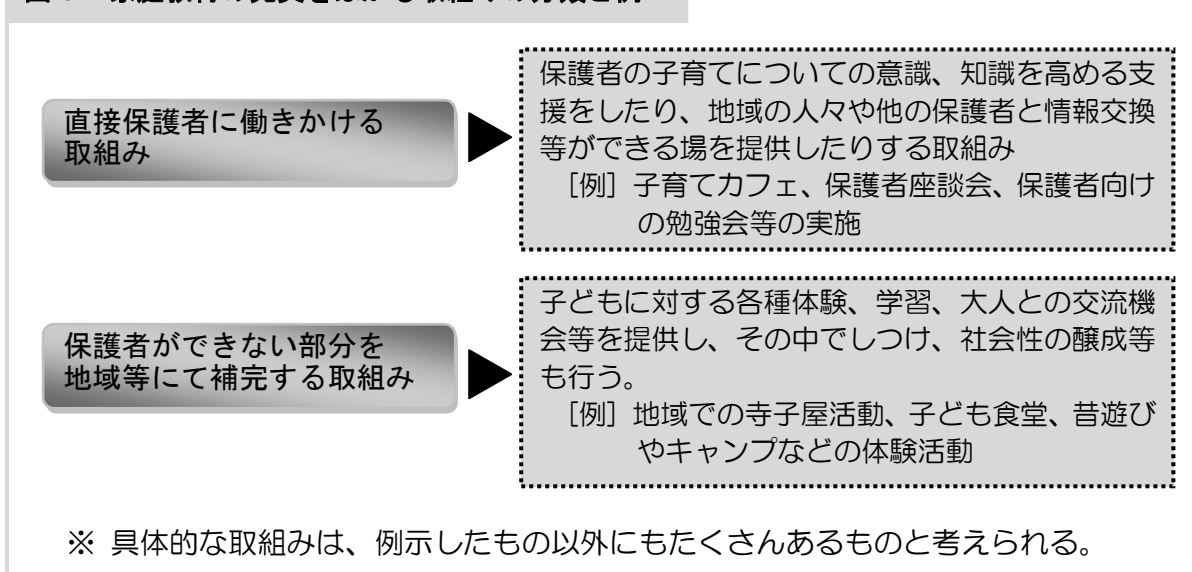


図1にて例示した取組みは、いずれも家庭教育の充実のためには有効なものである。そこで、個々の取組み内容の選択にあたっては、各実施者において、地域における現状、強み・弱み、長所・短所などを踏まえ、実情に応じたものを選択すれば良いであろう。

なお、その際は、こうした取組みを通じ、保護者、子どもと地域の人々、あるいは地域の人々同士のつながりをつくること、及び取組みを継続することで地域における定着がはかることについても、ぜひ念頭においていただきたい。

3 「地域力を活かし家庭教育の充実をはかる」ために必要であること

ここからは本年度審議の中心事項である、地域において家庭教育の充実をはかるための取組みが実施され、期待する効果を発揮し、さらに発展していくために必要となる方策に関する審議結果を示していくものとする。

なお、地域において、このような方策を含め取組みを進める際には、行政による支援が必要であることは言うまでもない。そこで、行政の強みを活かし、取組事例等の情報収集や提供、それぞれの活動の間の交流機会の創出といった地域の取組みに対する支援が行われることも希望する。

(1) 取組みと家庭の接点づくり

家庭にみられる課題の背景には、これまでの2年間の審議においても注目してきた「家庭が孤立傾向にある」、「家庭と周囲との関係が希薄化している」という社会状況が影響しているものと考えられる。

そこで、いわゆる「取組みと家庭の接点づくり」のための方策として、地域における実施者(支援者)にて、次の3点を目的とする工夫等が検討、実施されなければならない

(それぞれの目的において考えられる注意点、工夫などについては、次の図2のとおり)。

- 取組を知り、関心を持ってもらう
- 取組を理解し、参加してもらう
- さらに参加者等を増やしていく

例えば、過去の提言に基づき実施された参加型の取組みにおいては、募集定員を超えるほどの多数の方に参加していただくことはできなかったが、参加者からは「参加して良かった」、「このような取組みがあればまた参加したい」との声を多数いただいている。

このように、「取組みと家庭の接点づくり」を趣旨とした工夫等によって、まず、実際に取組みに触れていただくことができれば、保護者の取組みへの理解や継続的な参加につながるものとする。

図2 取組みと家庭の接点づくりの各目的において考えられる注意点、工夫例など

目的	考えられる注意点、工夫例など
取組を知り、関心を持ってもらう	<ul style="list-style-type: none">○周知、PR方法を工夫する(しっかりと伝わるものに)。○取組みの趣旨、テーマを興味が沸くもの、関心が高いものとする。○参加者が満足できるような取組みを続ければ、参加者が発信する口コミやSNSを通じ評判が広がる場合がある。
取組を理解し、参加してもらう	<ul style="list-style-type: none">○情報を発信する際は、内容の絞り込み、単純化等により、わかりやすいものとするよう心掛ける。○魅力的なイベント、学校行事と組み合わせるなど、参加につながる工夫を行う。○気軽に、楽しく参加できるようなものとするのが望ましい(まずはつながりをつくることから始める)。○申込方法等の手続きをできるだけ簡略化するなど、参加しやすい環境づくりを行う。
さらに参加者等を増やしていく	<ul style="list-style-type: none">○保護者、子どもの参加等を待つだけでなく、支援者から近づいていく手法も検討されるべきである。○参加者(保護者、子ども)が主体となるような実施形態も検討されるべきである。

(2) 地域における支援の輪づくり

先に述べたように、家庭教育の充実に向けた取組みは、地域における定着をはかることを念頭に実施すべきであるが、そのためには小さなものからでも良いので、とにかく始め、続けることが必要である。しかし、地域において取組みを進める上での課題において整理したように、取組みを立ち上げ、続けていくことは簡単ではない。

そこで、「始める段階」、「継続する段階」、「発展、拡大していく段階」のそれぞれにおいて、「地域における支援の輪づくり」に主眼をおいた工夫等がなされる必要がある(次の図3に、各段階において、地域において取組みを進める上で考えられる注意点、工夫例などを示す)。

図3 地域における支援の輪づくりのために考えられる注意点、工夫例など

始める段階

必要な人材の発掘をはじめ、取組みの立ち上げにつながる工夫等が求められる。

考えられる注意点 工夫例など

- 自治会、祭礼等に関連した既存の地域財産、人間関係等を活かす。
- 活動意欲がある方を対象に、後押しするような仕掛けが求められる。
- 実際に取組みを始めるために必要な情報等が得られるような場を設ける。
- その取組みが、支援者の方々にとっての負担にもならないよう進めることが必要である(「最初から力を入れすぎない」意識を持つことが大切)。



継続する段階

参加いただいている支援者の意欲を維持しながら、地域において取組みの浸透をはかり、支援者を増やしていくための工夫等が求められる。

考えられる注意点 工夫例など

- 取組みの周知、PR方法等を工夫する。その際、活動内容の紹介等を通じて、取組みの趣旨、効果等がしっかりと伝わるようにする。
- 保護者、子どもや支援者同士のつながりを広げていくような活動を地道に進める。
- 支援者自身が前向きに参加できるよう配慮する。



発展、拡大していく段階

取組み規模の拡大をはかるなど、地域の教育・健全育成の取組みの中で一定の役割を果たす存在となるための工夫等が求められる。

考えられる注意点 工夫例など

- 取組みの拡大は、支援者の増加に応じて行うべきであり、個々の参加者の負担を増やすことなく行う。
- 積極的に他地域の取組みを実施している支援者との交流や連携をはかる。
- 若者を支援者として呼び込むなど、これまでの概念に囚われない支援者の広がりをはかる(中高生の参加も検討してみてはどうか)。

4 家庭教育の充実から西区の教育・健全育成へ(仮題)

<考えられる記載内容例>

「取組みと家庭の接点づくり」、「地域における支援の輪づくり」により、取組みが地域において継続実施され定着に至った後は、取組みの内容の充実をはかっていくべきである。